

臨床現場から見る敏感肌の変遷

稲田堤ひふ科クリニック 関東 裕美
玉川クリニック

1. はじめに

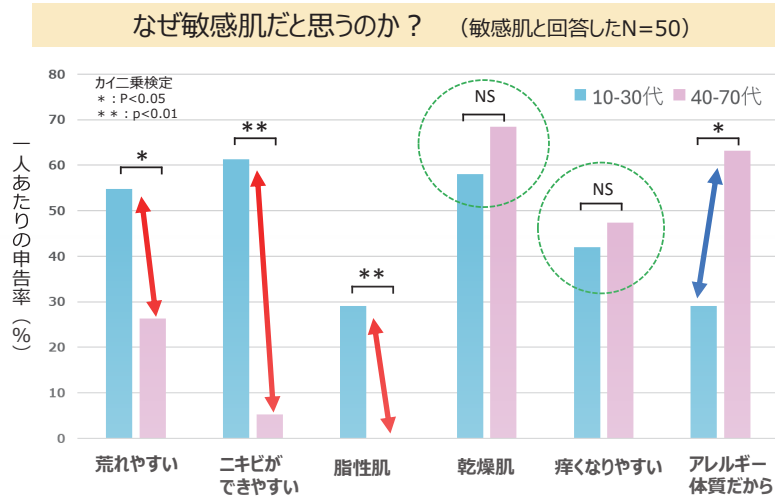
敏感肌という言葉は、皮膚科学の観点からの明確な定義はないものの「皮膚のバリア機能が健康な肌と比較して低下している状態」として認識され、一般社会にすっかり定着した感がある。実際は患者自身が感じる主観的な症状を示す「症候群」として捉えられ、ヒリヒリしみる、乾燥しやすい、紫外線や寒暖差、外気、物理的的刺激に反応する、ニキビができやすい、痒くなりやすい、赤くなりやすいなど愁訴は様々である。これらの患者からの訴えはバリア機能異常を推測させるものであり、臨床的に皮膚疾患によるもの、あるいは治療の影響も含めた全身疾患による皮膚過敏であると診断できる場合がある。ところが敏感肌であるという訴えがあるにもかかわらず、明らかな皮膚病変が見られないこともある。感覚過敏を訴える背景には免疫疾患や精神疾患との関与も検討する必要がある。

2. 敏感肌の解明

敏感肌は様々な環境によって容易に刺激を受け、疫学調査では驚くべきことに、敏感肌と自覚する人が世界中に広く存在することが明らかになっているといわれ、敏感肌が皮膚細菌叢の変化と関連している可能性についての調査検討が進ん

でいる¹⁾。本邦では20~50代の女性を対象に敏感肌への意識調査をした結果、女性の8割以上は敏感肌の自覚があると答えており年々その傾向は上昇していると報告されている²⁾。一方日本における敏感肌の有病率を評価するために18歳以上の日本人を対象に電話による質問票を用いて、割当方式で抽出した調査によれば、男性の52.84%、女性の55.98%が「どちらかといえば敏感」または「非常に敏感」と回答し、男女間に有意差は認められなかったとする報告もある³⁾。近年若年男子の美意識が高いことを日常診療で感じているが、洗顔・保湿、美容液、日焼け止めに至るまで徹底しているのに綺麗にならないと受診される患者が多い。昨年春に稲田堤ひふ科クリニックで敏感肌を主訴に受診された初診患者50名に、なぜ敏感肌だと思うのかを質問した回答のまとめを図1に示した。年代により敏感肌と感じる要因が異なり、若年層ではニキビができやすい、脂性肌、荒れやすいからと回答、40代以降の高齢層ではアレルギー体質だからとの回答が得られた。両年齢層で共通していたのは乾燥肌、痒くなりやすいことが敏感肌と思う要因として挙げられた。

敏感肌を主観的な評価のみでなく客観的評価と組み合わせることでその実態を解明すべく世界各国で様々な取り組みがなされている。敏感肌診断は困難とされながらもその基準を作る目的で乳酸ス



・30代以下では「**ニキビがでやすい**」「**脂性肌**」「**荒れやすい**」ので敏感肌と回答する割合が高い
 ・40代以降は「**アレルギー体質**」の回答割合が高い→年代で敏感肌と思う要因が異なる可能性
 ・「**乾燥肌**」「**痒くなりやすい**」は年代に関係なく、敏感肌と思う要因である。

■図1 初診患者が敏感肌と感じる要因

ティンギングテスト (LAST) の陽性患者を基準にすると、自己評価質問票の信頼性が高まることが報告されている⁴⁾。また敏感肌の特性はバリア機能と密接に関連することから、経表皮水分蒸散量、水分量、発赤、温度、皮脂指数などの皮膚組織反応を特定の画像診断ツールを用いることで皮膚表層での定量化が可能になり敏感肌の構造的特徴を診断する手段として評価できるとの報告もある⁵⁾。さらに敏感肌患者におけるLAST及びカプサイシン試験 (CAT) に対する顔面紅斑反応を評

していることもある。自身の皮膚質を理解できずに適切なスキンケアができていないと日常生活で敏感肌を感じるようになり受診される場合がある。本人または家族にアトピー素因があれば積極的な血液検査や皮膚検査を行って、アトピー性皮膚炎としての治療が必要かどうかを検討する。脂漏性皮膚炎…皮脂分泌の多い眉や眉間、頭皮や鼻の脇などの脂漏部位に生じる皮膚炎で、皮膚常在菌のマラセチア菌が関与する症例もある。患者が脂性肌と認識して過剰洗浄や保湿不足で敏感肌

これ以降の閲覧を希望の場合は、本誌をご購読ください。